

○小野田 武（三菱化成）

1. 技術開発戦略

企業における技術開発戦略は、当然のこととして企業の戦略に直結している。三菱化成の長期経営目標として、2000年において真の国際企業の実現を目指し、世界の化学企業の10傑入り（売上：150億\$以上、機能商品化率50%以上）を果たすべく以下の施策を強力に推進中である。

1) 三菱化成グループの総合力の発揮、2) 「選択と成長」の重視、3) 国際化のための基盤・体制づくり。

技術開発戦略は、このような経営目標に沿って機能商品分野の中でも、情報電子材料、医薬・バイオ製品、新素材・有機ファイン製品の3分野に重点を置いている。研究開発の推進機構、三菱化成及び三菱化成グループの研究開発体制、研究開発要員と予算の推移、特に三菱化成にとって重要な研究開発拠点である総合研究所の組織等について紹介する。

2. 基礎研究の位置付けと推進状況

三菱化成の研究開発費の約25%はコーポレートR&Dである。その内約8%は後述の三菱化成生命科学研究所の費用であり、約10%が企業としての基礎的研究開発費、約7%が事業部に属さない開発的な研究費に分類できる。この総研究開発費に対して約10%を占める基礎的研究は、総合研究所を構成する各専門的研究所で分散して実施されており、PCASTと呼ばれる横断的推進機構により調整・支援されている。またこの基礎的研究は、その性格から基盤的研究・先端技術的研究・探索的研究の三つに分類して管理されている。このPCASTは、同様に横断的機構であるICASTと呼ばれる技術調査推進機構によって支援されている。総合研究所における上記の基礎研究推進状況、化学企業の研究開発の特徴でもある対象技術分野の広さとシナジーの発現のための施策、研究者の育成・活性化のための施策、研究の国際化のための施策等について紹介する。

3. 三菱化成生命科学研究所

本年20周年を迎える該研究所は、化学工業にとっての将来の生命科学の重要性を考え、また医薬・バイオ分野への三菱化成の長期戦略への支援を期待しつつ、「頭脳流出を防ぎ、日本の基礎研究強化に資すること」「化学工業のイメージアップを図ること」を設立理念として、生命科学基礎分野における日本のリーダーを目指してきた。その運営は実質的にはアカデミックの世界と同様である。この20年間で、現在国内外の大学・研究機関で25名の教授を含め約150名の生命科学研究所出身の研究者が活躍している。該研究所の20年間の推移、現状の概要、三菱化成のR&Dとの関係等について紹介する。